〈第149回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」
音楽評論：東条碩夫

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 op.23

初演：1875年10月25日　ボストン

一度は自信を失いかけたチャイコフスキー

チャイコフスキーが遺した「協奏曲」には、ピアノ協奏曲3曲と、ヴァイオリン協奏曲1曲がある。このピアノ協奏曲の「第1番」は、それらの中で最初に書き上げられたもので、1874年に初稿の2台ピアノ用スコア（オーケストラのパートがピアノ用に書かれたもの）が完成されている。

この楽譜を、同年の暮にチャイコフスキーが彼の恩師、名ピアニストでモスクワ音楽院初代校長でもあったニコライ・ルビンシテインに見せた時のエピソードは有名だ。ニコライは、作品に厳しい批評を下し、大幅に書き直さなければ演奏に値しない、とまで言ったようである。チャイコフスキーは、気弱な性格ではあったが、また同時にプライドの高い人間でもあった（自らそう言っている）。「大変な衝撃」を受けながらもなんとか気を取り直し、翌年2月に管弦楽配置を完成すると、それを世界的なピアニストで指揮者のハンス・フォン・ビューローに献呈したのだった。ボストンでこの曲を自ら弾いて初演したのは、そのフォン・ビューローなのである。

作曲家プロフィール

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Pyotr Il'yich Tchaikovsky 1840-1894

ロシアのヴャトカ県に生れ、サンクトペテルブルクで没したロシア最大の作曲家。ムソルグスキーなど民族色の濃い作風を得意としたグループからは一線を画しながらも、西欧的な洗練さをも兼ね備えたロシア民族主義作曲家としての作風を貫いた。「悲愴」を含む6曲の交響曲、多くの管弦楽曲など名作が多いが、特に「白鳥の湖」を含む3つのバレエ音楽は、クラシック・バレエの最高峰的存在として音楽史上に不滅の位置を占めている。

ただし、ニコライとチャイコフスキーとの関係が、それで悪化したわけではなかった。面倒見の良いニコライは、そのすぐ3ヶ月後にもこの若者の「テンペスト」を指揮しているし、また折に触れ、彼の作品をいくつも指揮して初演してやっていた。そしてこのピアノ協奏曲の価値をもやがて認め、1875年の12月初頭には自ら指揮してモスクワ初演し、また他の機会にはピアノを受け持って演奏したこともあるほどなのである。因みにチャイコフスキーも、のち1889年にこの曲の細部に少なからぬ改訂の手を加えたのだった。

曲は、3つの楽章からなる。第1楽章冒頭に堂々と登場する有名な旋律が、間もなくさっぱり姿を見せなくなり、主題の役目を全く果たさないというのが謎だ。第2楽章では、フルートで奏される主題が美しく、人気がある。第3楽章は、チャイコフスキー特有の激しい熱狂の音楽。

楽器編成	独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

ベルリオーズ：幻想交響曲 op.14

初演：1830年12月5日　パリ

ユニークな作曲の動機

ベルリオーズが熱血的な人物だったことはよく知られている。彼もそれを堂々と自ら「回想録」に書いているのだが、中でも奇抜なのは、フィレンツェに滞在中、彼の婚約者マリー・モークが他の男と結婚することを知らされ激怒、関係者を殺害して自らも死すべく、2連発のピストル2挺に弾丸を込め、変装用の女性の衣装を用意し、馬車を雇ってパリへ向かったという話であろう。ただ、その時は途中のある断崖の上で馬車が停車した際、絶壁の下の海に向かって野獣のように吠えたのをきっかけに理性を取り戻し、「われながら見事なドラマの計画」をあっさり放棄した、と彼は「回想録」に書いている。信じられぬような話だが、その事件が、英国の人気大女優ハリエット・スミスソンへの憧憬と実らぬ恋を題材に「幻想交響曲」を書いて初演、そしてその後ハリ

エットとの愛が実って実際に結婚したという、ふたつの出来事の間に起こったことなのだから、ややこしい。だが、そのような彼の型破りの性格が、この「幻想交響曲」の中に、見事に投映されていることは事実なのである。

ベルリオーズがハリエット・スミスソンを見初めたのは、1827年にパリのオデオン劇場で観た英国劇団の公演「ハムレット」と「ロミオとジュリエット」においてであったという。その美しいヒロインへの称賛は、たちまち恋心に発展し、何通ものファン・レターを送ったが、ことごとく無視される。自らの名を彼女に知らしめようと演奏会を開いたりしたが、それも無益であった。そこで思いついた奇想天外の計画が、音楽で彼女を描き、それをマスコミの話題にさせて彼女に自己の存在を知らしめよう、というものであった。かくして成ったのが、この「幻想交響曲〜ある芸術家の生涯の挿話」なのである。だが、この初演の頃には、ベルリオーズのハリエットに対する関心はすでに薄れかけており、逆にこの演奏会の成功が前述のモーク家の両親に認められたため、同家の娘との婚約に発展した、ということになるのだが──。

因みに、ハリエットは1832年12月、パリでの「幻想交響曲」の演奏会に招かれ、そこでプログラムに印刷された解説と、会場の人々の注視を浴びることで、初めてベルリオーズの意図を知ったという。そして彼女は翌1833年、ベルリオーズと結婚したのだった。

作品に織り込まれた手法も画期的

「幻想交響曲」は、初演後何度も改訂を施されたが、ユニークな楽器編成（ハープ2台、鐘とオフィクレイドの使用、大編成のティンパニなど）とともに、当時の交響曲としては珍しい標題音楽的要素を含んでいる。特に、「恋人」を表わす「固定楽想」の多用は、のちのワーグナーの「ライトモティーフ（示導動機）」の先駆けとして、音楽史上画期的な意味を持つものだった。そして曲には、「ある感受性の強い芸術家が失恋して阿片を飲み自殺を図るが、その服用量が少なかったため死ねず、奇怪な夢を見る。その中に恋人の女性が一つの旋律として登場する」という説明がつけられている。

■第1楽章「夢と情熱」

序奏に続き主部に入ると、フルートとヴァイオリンに明快な主題が現れる。これが恋人を表わす「固定楽想」である。それは何度も登場しつつ、狂おしいほどの昂揚に達して行く。

■第2楽章「舞踏会」

主人公は舞踏会に出席、そこでワルツに乗って現れる恋人の姿（固定楽想）を見る。その姿もやがて踊りの輪の中に消えて行く。最後に一瞬見える彼女の姿。

■第3楽章「野の風景」

野原に独り、不安な気持に悩まされつつ彷徨う主人公。呼び交わされる牧童の笛。だが曲の最後では、呼びかけに答える笛の音は、もはやない。孤独の静寂の中に遠雷のみが響く。

■第4楽章「断頭台への行進」

恋人を殺した主人公は、死刑を宣告された。断頭台の刃の落ちる直前、彼の脳中に一瞬閃く恋人の姿（固定楽想の断片と、落下する刃の轟音）。

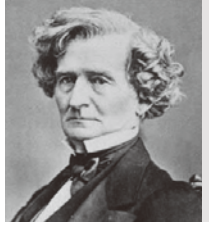
■第5楽章「魔女の祝日の夜の夢」

地獄に堕ちた主人公は、悪魔たちの宴の喧騒の中で、グロテスクな姿に変身した恋人と再会する（「固定楽想」がクラリネットの荒々しい崩れた姿で登場）。グレゴリオ聖歌「怒りの日」が鐘の音を伴って不気味に轟く中、曲は阿鼻叫喚の悪魔的なクライマックスへ。

（注）オフィクレイドは、この曲では現在テューバで演奏されることが多い。

楽器編成	フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（E♭クラリネット持替）、バスーン4、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ2、ティンパニ2、大太鼓2、シンバル、鐘、タンブーロ、ハープ2、弦楽5部 バンダ：オーボエ

作曲家プロフィール



エクトール・ベルリオーズ

Hector Berlioz 1803-1869

フランス南部イゼールに生まれ、パリで没した19世紀フランス・ロマン派最大の作曲家。26歳の時に「幻想交響曲」で名を成し、その後、劇的交響曲「ロメオとジュリエット」、交響曲「イタリアのハロルド」、劇的物語「ファウストの劫罰」、「レクイエム」、オペラ「トロイ人」など、作曲手法に新機軸を織り込んだ大規模な名作を数多く生みだした。「近代の楽器法と管弦楽法」など理論的な著作もあり、また指揮者としても名声を得ていた。